The Japan Lung Cancer Society

P-369　原発性肺癌手術例におけるPET/CTによるN因子評価

大畑　賀央・宇佐美範恭・伊藤　志門・岡阪　敏樹
坂倉　範昭・横井　香平
名古屋大学　呼吸器外科

一般的にFDG-PET(PET/CT)によるリンパ節診断は，CTによるものより高い正診率を有することが示されている.【対象と方法】当院にてPETを施行した2006年12月からの肺癌手術症例46例のうちリンパ節郭清を伴う肺葉切除以上の手術を行った40例を対象とし,【1】PETのN因子評価の正診率,【2】p-N2およびPET-N2例を検討した．なおPETの集積の判定は放射線科医による視覚的評価で行った.【結果】対象症例の平均年齢は66.9(39～85)歳，男性27例，女性13例であり，組織型は腺癌25例，扁平上皮癌9例，その他の組織型が6例であった．PET- N0, N1, N2は各々26, 8, 6例であり，p-N0, N1, N2は各々27, 7, 6例であった．PETのN因子に対する正診率は80%であり，CTでの評価(70%)よりも高率であった．PET-N stageとp-N stageが一致しなかった8例のうち，PETの過大評価例が4例(PET-N1→p-N0 2例，PET-N2→p-N0もしくはN1 2例)，過小評価例が4例(PET-N0→p-N1 2例，PET-N1→p-N2 2例)存在した．p-N2 6例のうちPET-N2が4例，PET-N1が2例でPET-N0の症例は存在しなかった．またPET-N2症例全体での正診率は67%であった.【結論】原発性肺癌のN因子診断においてPETの有用性が謳われてはいるが，当院での結果をみる限りはPETでのN2の評価に関しては限界があると思われた．なお症例数は抄録作成時のものであり，学会発表までの症例を加えて報告する.

P-370　炎症性リンパ節の術前FDG-PETによる評価

手塚　康裕・山本　真一・遠藤　哲哉・金井　義彦
大谷　真一・手塚　憲志・長谷川　剛・佐藤　幸夫
遠藤　俊輔・蘇原　泰則
自治医科大学　外科学講座　呼吸器外科部門

【目的】原発性肺癌に対する肺葉切除の際，手術手技上注意を要する局面の一つとして，炎症性リンパ節の肺動脈や気管支からの剥離操作が挙げられる．特に胸腔鏡下手術で肺動脈を損傷すると，安全に手術を遂行することが困難になる．そこで，術前FDG-PETの所見で炎症性リンパ節の存在を予見することが可能か検討した.【方法】原発性肺癌で当科にて肺葉切除を施行し，炎症性リンパ節の剥離操作に難渋した3手術症例を提示．各々の術前FDG-PETの検査結果を比較し，共通点や特徴的所見があるか否かを分析した.【結果】提示症例中2例の術前FDG-PETにて，両側肺門部および縦隔リンパ節へびまん性の集積を認めた．いずれの症例も術前胸部CT上，有意なリンパ節腫大はなく，原発巣と比較しリンパ節へのFDG集積は軽度であった．残り1例は術前胸部CTおよび手術所見上，病側肺門部に石灰化を伴うリンパ節が存在していたが，術前FDG-PETでは同部位への集積を認めなかった.【結論】炎症性リンパ節の存在を術前FDG-PETの検査所見により予見できる可能性が示唆された．しかし，転移リンパ節との鑑別や，石灰化を伴うような陳旧性変化に対しては，今後更なる症例検討が必要と思われた.

P-371　肺癌リンパ節転移の評価におけるFDG-PETの有用性

森川　洋匡[1]・田中　亨[1]・濱路　政嗣[1]・大久保憲一[2]
佐野　公康[3]・加藤　達雄[3]
国立病院機構長良医療センター　呼吸器外科[1]；京都大学医学部附属病院　呼吸器外科[2]；国立病院機構長良医療センター　呼吸器科[3]

【目的】肺癌リンパ節転移の評価におけるFDG-PETの有用性について検討する.
【方法】2004年12月から2007年5月の期間にFDG-PETを撮影し，病理組織診断でN因子の評価を得られた肺癌108症例を対象としてFDG-PETによるN因子の評価について検討した.
【成績】FDG-PETにおけるN因子の正診率は75%(108例中82例)，N0/N1/N2/N3の正診率は各々84.7(85例中72例)/30.0(10例中3例)/85.7(7例中6例)/16.7%(6例中1例)だった．リンパ節転移の有無に対するFDG-PETの評価の感度は51.8%，特異度は88.8%，陽性予測値は60.8%，陰性予測値は84.7%だった．縦隔リンパ節に限った転移に対するFDG-PETによる評価の感度は38.0%，特異度は94.2%，陽性予測値は61.5%，陰性予測値は86.3%だった．FDG-PET診断でN0症例のうち組織学的にN1/N2/N3は各々2/10/1例，N1症例ではN0/N2/N3は各々5/2/0例，N2症例ではN0/N1/N3は各々0/0/1例，N3症例ではN0/N1/N2は各々4/1/0例だった.
【結論】FDG-PETによって1cm以下の病変を検出するのは困難であることもあり肺癌リンパ節の転移のFDG-PETによる検出感度は低い．又，炎症性変化に対する偽陽性症例もあることから肺癌の病期決定には経気管支リンパ節生検や縦隔鏡，胸腔鏡などによる組織学的診断が欠かせないと考えられた．考えられた.

P-372　胸腺腫を始めとする前縦隔腫瘍におけるAcetate PETの有用性についての検討

梶　政洋[1]・江口　圭介[1]・櫻井　裕幸[1]・末舛　恵一[1]
大塚　崇[2]
東京都済生会中央病院　呼吸器外科[1]；前　東京都済生会中央病院　呼吸器外科[2]

【目的】我々はAcetate PETの胸腺腫の診断に対する有用性について第46回当学会総会にて報告したが，今回，胸腺腫と胸腺腫以外の前縦隔の腫瘍性変化についても症例を蓄積し，更なる検討を加えたので，ここに報告する.【対象と方法】手術の施行された胸腺腫7例，thymic cyst2例，胸腺過形成2例，bronchogenic cyst1例，奇形腫1例，を含む前縦隔の腫瘍性変化13例に対し，Acetate PET，FDG-PETの結果と病理所見等を比較検討した.【結果】胸腺腫に関しては7例すべて，Acetate PET，FDG-PETとも陽性であった．非胸腺腫症例では様々な結果を示し，6例中Acetate PETでは2例，FDG-PETでは3例の偽陽性を示すものがあった．胸腺腫についてはWHOの組織型分類によって各々のPETでの集積度の度合いが違う傾向も認められた.【結論】Acetate PETはFDG-PETとの比較によって胸腺腫を中心とする前縦隔腫瘍の鑑別や質的診断に有用である可能性が示唆されるが，更なる症例の蓄積と詳細な検討が必要とされる．Acetate PETの前縦隔腫瘍に対する有用性の検討は世界的にも無いと思われ，これからの展望が非常に期待される.

NII-Electronic Library Service